

横浜市大倉山記念館

所 有 者 横浜市
設 計 者 株式会社 環境開発研究所
施 工 者 株式会社 竹中工務店



新幹線の列車が多摩川を渡り、平坦雑然と広がる郊外住居群を走り続けて新横浜駅に近づくと、深い木々に囲まれた小山の上に西洋風神殿らしきものが遠望され、何時も心に掛かる風景であった。

今回のBELCA賞BRB部門の応募作品の中にこの横浜市大倉山記念館（旧大倉精神文化研究所）が登録されていることを知り、実物拝見を楽しみにしていた。

応募概要説明書の最初にも個性的で異形の建物と書かれているが、設計者は西洋古典建築を熟知していた長野宇兵治氏である。施主の気宇壮大な発想を具現化するため、西洋と日本との古代建築様式の混交を試みた類例の少ない建築物である。横浜市が昭和56年に荒れていた当敷地を公園予定地として買収した際に建物が寄贈され、管理が市側に移されたという。市民参加・市民開放型の施設として、建物周辺の公園整備事業と一体化した改修・保全計画が横浜市によって企画され、専門家の調査を基に実施された。

昭和59年、柱の構造補強、外壁、屋上防水等の補修工事が建物の外観のイメージを損なわないように配慮され行われている。内部の改修についてもオリジナルの素材である石材・木部などは殆どそのままクリーニングのみで活用され、原設計者の意図が伝わるよう細部にまで配慮されている。特に音楽ホールとして使用されている講堂については、特徴的な天井端部のデザイン等はそのままとし、照明装置の新設や舞台まわりの改修で小規模編成の音楽会等が快適に行われるよう改修されている。各会議室等も既存の古い格子天井を活用し、現代的な照明器具が違和感なく収められ、適切な照度の使い易い空間となっている。平成6年、内部塗装・クロス貼り替えが行われ、きれいな環境が維持されている。

特筆すべきは現地審査当日の市当局者、館長からの利用状況の説明であった。周辺市民の身近な文化施設、憩いの場として連日400人近い利用者がおり、中でもギャラリーの利用率は最近4年間の平均で99.5%、全施設でも80%という驚異的な数字であった。6ヶ月前から申込受付の盛況ぶりも当然のことであろう。

運営は、市民中心の自主的な方法がとられ、利用後には必ず使用者が清掃し、備品を元の位置に戻すこと、ゴミは必ず各自持ち帰ること等、肌理細かく定められ守られているとのことである。

建物や周辺環境に対して、横浜市指定文化財として愛用の込められた日常運営が行われていることが推察され、当建物の昭和初期に於ける建設意図を越えてこのように熱意のある市当局・記念館管理者と市民のてによって活用されている事実は、当賞に相応しい建築と認められた。